慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	理財学会例会
Sub Title	
Author	
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.6 (1910. 6) ,p.767(139)- 768(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田学会記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100615-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

毎年元金の二厘五毛を償還すれば　七二、二四年にて完濟
同　一分　〃　四一、〇三同　同
同　二分　〃　二八、〇一同　同
同　三分　〃　二一、六五同　同
同　五分　〃　一五、〇九同　同
同　八分　〃　一〇、三四同　同

氏は終はりに臨んでモースト氏の如く、市債集中問題を論じ其効果を述べたれ共、獨逸國當時の金融市場に於ては此方法に依るも利する所少なく、又近き將來に於ては、市債の發行は分散主義に依るの外なからんとの結論を與へたり。

（星野勉　三）

三田學會記事

史學會例會

同會第一回例會は去月二十八日午後一時より慶應義塾大學第二十六番講堂に於て開き、先づ幹事の開會之辭に次ぎ、小澤愛圀氏は『德川初期に於ける日韓關係』と題し、對馬の經濟狀態より說き起し幕府創立以前の兩國關係、十年朝鮮使者の伏見に於ける家康との謁見、十一年の國書問題、十二年の朝鮮信使、十四年の國書問題已酉約條等の事より、元和三年の聘禮に到るまで詳細に之を論述し、次で阿部敎授は『宗敎改革時代に於ける獨逸の經濟狀態』と題し、先づ宗敎改革時代に於ける獨逸の經濟狀態は甚だ順境を失せりとの、前提より本論に入りて、當時 Fugger. Welser の加き事業家の獨占行はれたるを以て物貨は日々騰貴し、而も其前時代より平均二三割の高價を來し居たるが故に細民は其日の生活に追はるゝ如き狀態に陷り不平滿々たれども、政府亦之を如何ともなす能はず、Luther か如きも大に其不平を鳴らし從て百姓一揆なるものが宗敎改革にも助力を與へたるや明なりと論じ、要するに此時代の經濟狀態は正に宗敎改革の起る原因と見ても不可なけんと結びたり、散會したるは午後五時にして、當日は田中、川合、阿部、神戸、廣瀨、の諸敎授を初め學生多數の來會ありたり。（を、あ）

理財學會例會

五月廿八日理財學會例會を圖書館大廣間に開く、來り會するもの五十五名、午后七時より講演を開始す。幹事の紹介を以て永井早大敎授は滿韓集中論なる演題を掲げて、大略左の如く講演を試みたり。

殖民の原因を以て生活の困難に歸するに反對するものは歷史に拘泥せるものにて十九世紀以來パンの壓迫によりて移住を企つるもの殊に多きを見る、之に對する國家の態度を見るに內國に於ける生產力の減少を理由として英獨に於ては嘗て移住を禁止したり、我國にもかくの如き傾向あれども生產力は結局窮なく恢復せらるべきのみならず移住民の海外に於ける內國品の需要を增加すべきを以て歡迎すべきもの、盛なる儘に放任すべし之に二種あり、分散せしむると集中せしむると卽ちエミグレーションとコロニゼーションと是なり、後者には殖民地の施設に對する財政上の負擔多きに對して前者は渡航にも便に、財政上にも負擔多からずと雖も次の如き不利益あり、（一）生產力の最も盛なる國民を失ふ、（二）低利の外國資金を以て廉價なる移出勞働を用ひしめ內國工業を驅逐す、（三）移民は外國化するを以て本國品に對する需要を增加せず、（四）移民の成功は離化を要す本國との戰爭起らんか、祖國と戰はざるべからず、故に近年は各國共に移民を抑制し勞力範圍に人民を集中せしむとす英國の如きは都市失職者を送て殖民地を開拓せしめ帝國問題と社會問題とを同時に解決せむとす。

滿韓の地遺利多く且地位眞好にして我國に對して經濟上の未來を有す、人口稀薄にして未開の可耕地數百萬町歩、韓國の農產と南滿の鑛物とは甚だ有望なり、然るにこの遺利を捨て、南洋を說き南米を稱す、何ぞ誤れるの甚しき、日韓合邦は抑末なり唯急を要するは國民を滿韓の地に集中して經濟的基礎を固むるにあり。

永井敎授の講演終るや福田敎授代て羅馬の商事會社なる演題の下に一場の講演あり、概要左の如し。

羅馬（今の羅馬府にあらず）は今日の文明の源泉にして商事會社亦これより發したる流の一なり、商事會社とは必ずしも商を營むものの謂にあらず、營利會社の意にして、農も工も共に商事たるに洩れず、近來は會社に關する法學者の觀念稍變じたれども從來大多數の學者は商事會社に就ても羅馬法を師とし會社法理を說くに自由契約を以てせんとせり、然るに經濟上より研究する時は商事會社は羅馬の經濟生活に當て敢まず、羅馬法とは相容れざるやに思はる、羅馬の會社はソチエタスと稱し當事者間にのみ有效なる契約にして他人に之を對抗するを得ざりき、其初鑛山鹽山の開拓、海外貿易、租稅受負に關して生じたるものにて當時羅馬には工業（市場生產の意に於ける）なく、從て工に關するソチエタスはなかりき、今日の商事會社は名は商事會社なれども實は工事會社なり（補助的商を除けば）、ソチエタスと今日の商事會社とを同一視するは事實に基かざるものなり、ソチエタスは貸借の進化にして資本は貨幣のみ、勞働の

出資を認めず、此點に於ては今日の株式會社に同じけれどもヂオクレチヤンの時代に至りて勞働の出資を認めたり、これ今日の會社との間に存する根本的の相違なり、かくの如くして商事會社の淵源は之を羅馬のソチエタスに求むるを得ず、十六世紀の終りに當て外國貿易に關してイタリアに發したるコンメンダこそその源なれ、コンメンダは羅馬法の契約にあらず、勞働と資本とを對等なる出資と認めたるものにしてコンメンダターレは經營の任に當りコンメンダトーレは商品を供し船主は船舶を供せり、今日の如く株式に分つとなけれども商事會社の特質たる勞働と資本との合同は茲に始めて見出し得べし。

羅馬法の勞働を認めざりしは當時は勞働なる觀念なかりしを以てなり、その始めて喚起せられたるは獨逸人の勞せざるべからざりしと耶蘇教が勞働の神聖を敎へたるとによる、而して十字軍の中心たりしイタリアに於てその頂に達しコンメンダ茲に起れり、かくの如くなるを以て今日の商事會社を羅馬法に求むる能はざるは怪しむに足らざるなり。

福田博士の講演終るや鎌田會長の謝辭あり、是にて演說を終り茶菓の間に談笑して興の盡くるを知らず、場内全く喪彩を見ざるに至りしは午後十時半なりき。

右に掲げたる兩教授講演の大要に關しては文責筆者にあり附記して累を講演者に及ぼさざらむことを期す。（ま、ゆ）

前號（第參卷第五號）目次

論說

物價名義雜考　福田德三
殖民及び殖民地の意義　堀切善兵衛
英國の銀行準備金問題（其二、完）　堀江歸一
社會的勢力としての慾望を論ず　田中一貞

講演

陪審制度論　大場茂馬

雜錄

ギールケ教授の獨逸憲法論　小倉和市
英國工場法の淵源（其一）　高橋誠一郎
教育史上の自然主義（其二）　石田新太郎

新著紹介

フイリツポヴイツチ著 氣賀勘重解 說經濟政策後編上卷　三邊金藏

次號（第參卷第七號）目次

論說

論題未定　堀切善兵衛
同　星野勉三
同　林毅陸
人生の意義及價値（其五）　川合貞一

雜錄

英國工場法の淵源（其三）　高橋誠一郎
表題未定　三邊金藏
同　小倉和市